

水

tanboochinharu

名付けられていないものは存在しない、という話はどこで聞いたのだったかしら？「きみどり」という言葉がなければそれは緑か黄色の延長でしかなくて、「緑」という言葉もなければその緑自体が青の延長でしかないのだ、とかそんな話。神様が存在するのは、それが存在する何か——物質であれ、概念であれ——につけられた名前だから、という一文で結ばれていたように思うのだけれど。

歯黒さんの長く骨ばった指がわたしの体に触れるとき、わたしはいつもそのことについて考えます。だって、触れられることは、名付けられることに似ているから。わたしの体は指でなぞられたところから順に存在を主張し始めます。触れられることで初めて存在するのかもしれない、とさえ思ったりします。それが何かを探るような、何かを確かめるような、とても丁寧な触れ方だから。その感覚を味わいながら自分の中に沈んでゆくと、やがて歯黒さんは消え、ここにはいないあの人の息遣いを感じるようになります。

「何がおかしいの？」

上ったり下りたり、一連の感覚がすべて過ぎて行った後、隣で寝転んでいた歯黒さんの顔が——眉の濃い、黒目の大きい、均整のとれた顔が——、わたしの目の前に現れます。抱き合った後の歯黒さんは無邪気です。「歯黒」という典雅な名字の持ち主ですが、もちろんお歯黒などはしておらず、白い歯がきちんと整列した清潔な口元をしています。彫が深いので、お歯黒は似合わないでしょう。お歯黒というものは、のっぺりした顔——わたしの顔みたいな——に陰影をつけるためにあるのではないのでしょうか。ハイライトとかシャドウとかと同じに。

「笑ってた？わたし」

「うん、笑ってた」

「考えごとしていたの」

「烏丸さんのこと？」

私の腰に手を添えながら、歯黒さんはわざと悲しそうな顔を試みせます。大きな熱い手のひらです。

「うん」

と言った後、

「あなたのことも」

と付け足すと、歯黒さんは素直に嬉しそうな顔をしました。シーツの上で、裸の体が裸の体に包まれます。

「考えるっていいよね」

本当に、と心から答えると、答えたそばから烏丸さんの目や手や髪が心に浮かび上がって来ます。今、歯黒さんと一緒にいるのに。わたしって、いつもこうなのです。ここにはない何かのことを、今ではないいつかのことを、いつも考えている。

烏丸さん。からすまさん。その名の響きを思うだけで、何と云うか、エネルギーのようなもの——つぶつぶして、きらきらした、肉眼では見えない物質——を含んだ生温かい水が体の内側を満たし、外へ溢れ出るのを、わたしは止めることができません。烏丸さんがいなければ、わたしは灰色の砂漠です。生きるのに飲み水以外の水が必要であることを、わたしは長い間忘れてい

ました。

「昼間っていいよね」

どうして、と尋ねると、齒黒さんはわたしの腕をつかみました。

「産毛が見えるから」

「いやだ、剃った方がいい？」

「ううん。俺、産毛って好き」

そう言って、腕にほおずりをする齒黒さんは、何だか小さな男の子みたい。男の人といていいと思うのは、それぞれのやり方でわたしの心に触れて、色々な感情を呼び起こしてくれることです。たとえわたしたちの間に、恋が生まれていなかったとしても。

秋の始まり、月曜の午後、時間は大きな川みたいにゆっくりと流れて行きます。昼のひなかに男の人と抱き合うのも、いいものですね。転職後初の有給を存分に味わい、わたしは自分の人生が充実しているような気分になってしまいます。美容師の齒黒さんは月曜が休みなのですが、わたしはカレンダーどおりに出勤するので、こんな昼間の時間は本当に貴重なのです。

「俺のこと、友達としては好き？」

齒黒さんののんびりした声に返した「好き」という言葉に嘘はないけれど、そうは言っても、ここにいるのが烏丸さんだったら、と考えずにはられません。あの人は、どんな体をしているのでしょうか。冷たいかしら。温かいかしら。初めて体を合わせるとき、一体どんな顔をするのでしょうか。

考えてみれば、不思議な話です。わたしの人生を埋めているのは、そのほとんどが体験ではなく、空想や妄想なのですから。こうして空想に潜り込むだけで、こんなにもうっとりする。うふふ、という声さえ出しそうになる。でも、それと同時に、こんなことって前にもあったわ、と思ったりする。

——最初の恋と最後の恋の違いは？

あのセリフは、ムーミンの漫画に出てきたのだったかしら。

——これが最後、と思うのが最初の恋。これが最初、と思うのが最後の恋。

これが正しいとしたら、わたしの恋は、最初の恋でも、最後の恋でもないのでしょうか。

相手が、挿絵も会話文もない——イデオロギーはある——条立ての文章の集合であってさえ、相性というものがあることをしみじみと感じます。「農園貸付要綱」の審査の際は、土を耕すおじいさんやおばあさん、彼らが持参するステンレスの水筒やおにぎりや駄菓子、そしていびつな野菜たちの姿を思い浮かべることができました。しかし、この「病後児保育要綱」はどうしたものでしょう。わたしは何とか相手と分かり合おうと、「及び」を「又は」に直してみたり、「病後児を保育」「子育ての不安を軽減」「児童の福祉に貢献」などという崇高な目的の羅列に順序を与えたり、対象児童の年齢や体の状態を書き加えたりしているのですが、相手はちっとも答えてくれません。

とはいえ、このような事態が嫌いなわけではありません。文字に溺れているときの、果敢な半面静かな心持ちが、わたしは好きです。

「水野さん」

左手のデスクで黙々と書類を片していた係長が、本の山から顔を出しました。業務以外では実に無口で気弱にさえ見えるのに、条例や訴訟のことになると淀みなく滔々と語るこの人を、変わっていると思わないではありませんが、仕事に対する気高いほどの姿勢には、ただただ素直に尊敬してしまいます。奥さんも子どももいるということでしたが、わたしにはどうしてもこの人の家庭を想像することができません。

「JAS法ってこの、農林物資の規格化なんとかっていう法律のことだよな？」

「そうですね」

「これ、書き方が統一されてなくてわかりにくいと思うんだけど、見直してくれる？」

わかりました、と言って書類を受け取りながらも、ちょっとくやしい気持ちになります。どれだけ丁寧にやっているつもりでも、書類がすんなり通ることはまずありません。十年以上同じ仕事をしているこの人には、もちろん敵うはずがないのだけれど。

職場で、わたしは「水野さん」と呼ばれています。それは、それがわたしの名字だからなのですが、わたしはそう呼ばれることが好きです。寒色とか、冷たい和菓子を連想させる、と自分では思っています。正確に言うと「水野」は別れた夫の名字であり、わたしに元々与えられていたものではありません。全く不思議なものです。わたしが結婚していたなんて。のみならず、離婚までしているなんて。

書類に目を落としながら、この係長が烏丸さんだったらよいのに、とわたしはつい思ってしまいます。例えば、書類を渡すときにほんのちょっと、あの上品な手に――烏丸さんの手は大きいけれど、造形はむしろ女性の手のように繊細なのです――触れたら、うきうきした気持ちで仕事に取り組めるのに、と。今の仕事はおおむね気に入っていますし、それはそれでよいのですが、烏丸さんが職場にいれば、毎日出勤することが、ただただ出勤し、仕事をし、ランチを食べ、また仕事をするという日常が、きっと特別なものになるでしょう。そう思うと、わたしは前の仕事を辞め、烏丸さんと離れ離れになってしまったことを、ほんのちょっぴり後悔します。

でも、それはほんのちょっぴりです。だって、こうやって考えることが、もう十分なのですもの。恋。空想。妄想。人間に本当に必要なのは、ファンタジー、精神を潤す水がなのだと、わたしは真剣にそう思っています。

「水野さん、それとこれ、会計に出しといてくれる？」

はい、という返事が思ったより間延びして聴こえ、思わず肩をすくめましたが、もちろん誰も気にしません。みな黙々と仕事をしています。当初は気が滅入りそうだったこの静かさも、今ではすっかり快適なものになりました。わたしの他の五人のメンバーが全員男なので、気を使わずに済むのもよいところです。

二十五歳で結婚し、二十七歳で離婚しました。二十八歳で勤めていた翻訳会社を辞め、採用された市役所では希望通り法務担当課に配属されました。

もうすぐ三十一歳になるわたしは、年々体が軽くなるような気がします。

「厚切りトースト」というものに、バターをこってり塗るところを想像します。室温で柔らか

くなったその動物性の脂は、黄金色にてらてら光っているでしょう。乾いた荒れ地に降り注ぐ雨みたい、パンに吸い込まれていくバターは、音さえたてるかもしれません。「じゅわり」とか、そんな。

「お姉ちゃん、聞ってるの」

妹の声に、わたしはメニューから顔を上げます。持ち手が銀色の透明なカップに注がれた、「アールグレイで香りをつけた冷たいルイボスティー」という液体から放たれる、微かだけれど清涼な香気。バターを塗るのとトーストを齧るのと、どちらが気持ちがよいかしら。

怒った顔をつくろうとしたけれど途中でやめたようで、中途半端な表情を浮かべたまま、妹はため息をつきました。

「お姉ちゃん、変わったよね」

離婚してから、という言葉は妹はもちろん言いませんが、言わない分強調されたその事実が、二人の間の空間にぽっかりと浮かびます。あなたも変わったわ、という言葉はわたしは心の中だけで返しました。どういう気持ちなのでしょう、離婚した姉に結婚の報告をするというのは。

烏丸さんがここにいたなら、と想像しても、いつものように水は湧き上がって来ず、ちょっと落ち着かない気持ちになります。妹と話すこと自体は嫌なわけではありませんし、彼女のことはもちろん大切です。ただ、彼女は彼女と過ごした二十七年間そのもののようで――妹は三歳年下です――、それがわたしを混乱させるのです。わたしたちは、変わりました。それなのに、ある部分では何も変わっていません。

きゅうりと辛子のサンドイッチをかじりながら、窓の外に目を向けます。この喫茶店は昔風になが暗いため、窓の外は嘘のように明るく、希望とか未来とか輝きとか、そんな白々しい言葉をわたしに連想させます。何だか、ずいぶん遠くまで来てしまったような気がします。

瞬間湯沸かし器の話をしてしまおう。子どものころ、わたしはそれを恐れていました。それがしゅうしゅう湯気を立てるそのとき、中に小さな生き物や、あるいは魔法で小さくなった両親が――そんな絵本が家にあったのです――入っていたらと想像し、その恐怖に耐えられなくなってしまうのです。だから、お湯を沸かすのは、勇敢な妹の役目でした。

そう、妹は勇敢でした。長い滑り台を滑り降りることも、自転車の補助輪を外すことも、親戚に挨拶をすることも、一人で電車に乗ることも、膨らみ始めた胸にブラジャーをあてることも、オーストラリアに留学することも、そこで様々な国籍の男の人と付き合うことも、彼女をたじろがせることはありませんでした。本当に、わたしの方が妹であればと、何度思ったことでしょうか。彼女の後ろを歩けたならば、もっと生きやすかったのにと。

そんな妹が、芸術家のタマゴとかいう韓国人の学生でもなく、ちょっと想像もつかないくらい裕福な中国系のアレルギー専門医でもなく、職業不詳のスイス人のおじさんでもなく、電力会社に勤める平凡な日本人と結婚するのです。姉のわたしが結婚生活を放り出し、恋人でもない男と寝ているというのに。

「で？」

空になったコーヒーカップを置いて、妹がわたしの顔を覗き込みます。

「でって何？」

「何か感想は？」

「ないよ。結婚式は行くけど」

そう、と言って穏やかに微笑む妹は、ありきたりの女みたいに見えます。少し迷ってから、彼女はこう続けました。

「お姉ちゃん、元気なの？」

「え？」

「それが一番ききたかったんだけど」

うん、とだけ答えて、妙な気持ち――足元の地面が消失したような――になりました。妹は、かつてわたしの世界の一部でした。いや、一部どころではありません。世界の半分はわたしで、半分は妹でできていたのです。

――置いて行かないで。

かつて言いたかったことはそれなのだと、今のわたしは知っています。しかし、それを言うべき時は遠く過ぎ去っていて、今やわたしは日々失った世界を、男の人で埋めようとしています。

お昼休みにごめんね、わたしも用事があるからと妹は言い、自分の分の料金を置いて席を立ちました。わたしはぐらぐらした心を立ちなおすべく、額に手を当て、目をぎゅっつつむります。妹がいなくても生きて行かれることを、今のわたしは知っています。離婚しても、仕事をやめても、未来のない恋をしても、生きて行かれることを。だってわたしは、水源を見つけたのだから。

時計は十二時三十五分を差しています。そろそろ戻って、歯を磨いて、フェイスパウダーをはたいて、リップとグロスをぬらなければなりません。そうやって、自分の容姿がさほど美しくはないにしても、努力次第で男の人を振り向かせられる程度であることを確認してから、午後の仕事に臨むのです。わたしは会計を済ませ、光あふれる外の世界に足を踏み出しました。

知ることと知らないことと、どちらがよいかはわかりません。でも、少なくともわたしは今、人生のどの時点より生きています。

「さむ」

そろそろ上着がいるな、と思いながら、マンションまでの道を急ぎます。ほとんど暮れてしまった空に、白い三日月がかかっています。家族と暮らした家より、前夫と暮らしたアパートより、一人で暮らすマンションの一室の方が、何より親しく感じられるのはどうしてでしょうか。

じゃがいもとしめじがあったから、鱈を買って蒸し焼きにしようかな、と思い、それが前夫と一緒によく作った料理であることを思い出します。どんな料理もおいしいと言って食べた後、彼は洗いものをして、お風呂をわかしてくれました。注意することも、非難することも、叱責することもありませんでした。夫としてあれほどできた人間を、わたしは他に知りません。自慢の夫でした。本当にりっぱな人でした。でも、彼という限り、悪者はいつでもわたしでした。彼に対して何も感じなくなったのも、烏丸さんのことばかり考えるようになったのも、だからすべて、わたしのせいなのです。

烏丸さん。からすまさん。ああ、一体どうしろと言うのでしょうか。こんなのって、止められる

わけがありません。いつでも言ってほしいことを言ってくれた人。わたしの容姿ではなく、文章をほめてくれた人。

——なんか、詩みたいですね。

同じ部署になってすぐ、わたしが訳した文章を見て、烏丸さんは言いました。笑っても、一重の目はほとんど形を変えませんでした。秋の日差しのようにやわらかくなりました。

「どうして？それ、契約書ですよ」

「いや、そうなんですけどね。なんていうか、言葉が流れていくような感じがするんです。涼しい感じがして、好きだな」

その文章は、結局上司によって原型をとどめないくらいに手直しされてしまいました。わたしが訳し、烏丸さんと上司がそれぞれ修正して、やっと完成です。それでも、それだからこそ、わたしは烏丸さんの言葉を、何度も何度も心の中で反芻しました。あのときは、これが恋になるなんて、思ってもいなかったけれど。

烏丸さんは、とてもきれいな字を書きます。きれいなだけでなく、自由で、のびやかです。大人しくて地味な烏丸さんには、きっと見た目からは想像もできないような、情熱が秘められているのでしょう。

こつ、こつ、とよく光るローファーのかかとで音を立てながら、アスファルトの上を歩きます。そののびやかな字で書かれた、「水野さんへ」で始まるただの事務連絡の付箋を、わたしは何枚も何枚も持ち続けています。眺めたり、触ったりさえします。わたしって、多分、変態なのでしょうね。

図書館は黒と茶色だけで構成されていて、全体に古く陰気くさい建物だったけれど、その分窓の近くにできる日だまりが、平和でやわらかに見えました。プラネタリウムは同じ建物の二階にあって、そこは暗さも陰気さもひときわだったのですが、古い木のおいの中で見える星は、人工だからこそ近しく感じられました。ナレーションがうるさくて——理学的興味を満たすためではなく、リラクゼーションのために星を見に行ったのです——、持参した無音のヘッドフォンをつけると、こおおお、こおおお、と波のような音が聴こえます。まるでノアの方舟にのっているみたい。過去は全部全部洗い流され、新しい時間の中で、今わたしだけの星を見ている。安らかな解放感に満たされたわたしは、だんだん星さえもどうでもよくなり、目を閉じて、隣に烏丸さんを、その素敵な手を、黒い髪を、痩せた体を思い描いていたのでした。

あれは庁舎前のぼろい掲示板——今ではわたしがそこの文書を貼ったり剥がしたりしてしまっ——に貼られた採用試験の結果を見に行った帰りでした。図書館は公園の中だときいていましたが、建物があまりに地味だったので、わたしは公園の端から端まで——黄色いジャングルジムやスロープの三つついた滑り台がある遊戯スペースから、手入れのあまりよくない芝生を通り抜けて、何の変哲もないバラとツツジの植え込みのあたりまで——歩く羽目になりました。見つけたとき、何だか眠り姫のいるお城のようだと思いました。記憶の中の公園はハッカの匂いがしていて、それは単にわたしがハッカのキャンディを舐めていたからなのですが、その匂いが一層プラネタリウムで過ごした時間を特別なものにしていきます。

あのとき本当に烏丸さんがいたら。手をつないで並んで星を見られたら、本当によかったのに。残念ながら、プラネタリウムはなくなってしまうのです。最近では3Dとか三百六十度とかムーミンの星空とか、色々な工夫を凝らしたプラネタリウムが近隣の市にあって、ああいった昔風のものにはやらないのだとか。

みずのさん。やわらかくて遠慮がちな声がきこえたのは、感傷にひたりながらプラネタリウム館条例を審査していたときでした。ジムノペディみたいな、上品すぎて空気に溶けていくような声。

「烏丸さん？」

そのときのわたしは、クリスマスと誕生日のプレゼントを同時にもらった子どものような顔をしていたと思います。

「どうして、一体」

いろいろなきらきらを体中から発散させているのを感じながら、それでもできるだけ抑えた声で言い、わたしはカウンター越しに烏丸さんと向かい合いました。

近くを通ったから、お昼、一緒にどうかと思って。控えめに微笑みながら、それでも嬉しさを隠せない様子で、烏丸さんは嘘をつきました。その瞬間、周りのものすべてが変わったのです。カウンターに置かれたポトスの鉢植えも、「速達」や「書留」や「重要」といったスタンプがぎっしり詰まった四角い箱も、銭湯の体重計が寸詰まりになったみたいな馬鹿みたいに古くて重たい秤も。昔々、妹と一緒に名前をつけた小さな人形や消しゴムや折り紙の鶴みたいに、それらは生命を得て、わたしたちを祝福したのです。

信じられないわ、とわたしは思いました。そして、烏丸さんも同じように感じていることがわかりました。

爬虫類みたいな顔の人だな、と思っていました。吊りあがった目、こけた頬、ひよろりとした体。黒くて多い髪の毛は、いつでも伸びすぎて寝癖がついていました。伸びるのが早すぎて、切るのが追いつかないのです。

離婚しました、と言ったのは、訳のわからない苦情を延々流し続ける受話器を、烏丸さんがわたしからひったくって、何やら嵐のような勢いでまくしたて、破壊的な音を立てて電話を切ったときでした。

「え？」

「離婚したんです、わたし」

「今、言いますか？」

真ん丸になった目がおかしくて、わたしは笑いました。彼はといえば、妙な具合に焦り始め、バーバリーのハンカチで汗をぬぐい始めました。それがまたおかしくて、本当に、久しぶりに心からおかしくなって笑うと、烏丸さんも自分で自分がおかしくなったようでした。

「水野さんも大変ですね、いろいろ」

ほとんど意味のないその言葉を聞き流しながら、受話器の位置を直そうとしたそのとき、ほんの少しだけ指先が指先に触れました。烏丸さんの指は熱くて、だから、わたしの指の冷たさを、彼

は感じてくれたと思います。そして、どちらの指もすぐに引っ込められたのだけれど、わたしはその一瞬にたくさんのことを発見したのです。

烏丸さんとわたしが、きっとよい関係を築けること。人は人生のどんなときにも、人を好きになってよいこと。結婚のためでなくても、セックスのためでなくても、どこへも行けなくても、恋をすることができること。

正しく生きられなくても、自分がひどい人間であっても、絶望しなくてよいこと。何もかもを一一思い出も、罪悪感も、夢だったけれど疲れ果てていた翻訳の仕事も一一捨ててもよいこと。そして、本当は、そんなことのすべてが瑣末なものであること。

烏丸さんは、何とかという宗教を信仰していて、同じ信仰をもつ人とししか結婚することができません。結婚を前提に付き合っている女性もいたはずですが、でも、だから何だというのでしょうか。そういったこととわたしを好きなこととは、全く別の話です。大切なのは、結婚することでも会うことでもなく、思い描くこと。だからこそ、わたしは仕事を辞めることもできたのでした。

ごはんを食べるのは一苦勞でした。おそば屋さんの二人がけのテーブル席に座り、肌寒い日だったので、温かいわさびそばを注文したのですが、熱くなった体に湯気を立てるおそばは全く不適當な食べ物でしたし、普段なら何てことのないわさびを溶かしたそばつゆに、何度もむせ返らされてしまいました。それで、烏丸さんと同じつめたい山菜そばにすればよかったと、一分に一回は後悔する羽目になりました。

それでも、あの幸福な時間。

烏丸さんはたくさんのことを話しました。わたしの後に来たきりんみたいに背が高く、脚が長くて、顔が小さい男性翻訳者こと。アマリさん（どんぐりを集めるリスみたいにほっぺたが丸いから、「アマリリス」と呼ばれている事務の女の子）が妊娠したけれど、もともとの体型のせいで、傍目にはそうとわからないこと。仕事は相変わらずヒマなときは死ぬほどヒマで、忙しいときは死ぬほど忙しいこと。会社で飼い始めた捨て猫が、なぜだか「ピョートル大帝」と呼ばれていること。

わたしもたくさん話しました。今の仕事で扱うのは日本語の書類ばかりだけど、英語の書類より難解なものがあること。条例や規則や要綱にはイデオロギーやエネルギーがあって、わたしがいつも訳していた契約書などとは全然違うこと。係長が興味深い人で、質問したら「何々法第何条に書いてある」ということまですらすら答えてくれること。同期の女の子と野球観戦に行ったら、前の座席のオジサンが、相手チームの応援席にしょっちゅう中指を立てていたこと。

おそばが熱くて、おなかがたぶたぶになるほどお冷を飲みながら、わたしは一生懸命に話しました。でも、本当のところは、話の内容などどうでもよかったのです。ここにわたしと烏丸さんがいる。笑って、笑い過ぎて、話して、話し過ぎて、ほんの少し戸惑って、でも戸惑う必要がないことを知って、一瞬前よりずっと幸福な気持ちで笑い、話す。大切なのはそのことでした。

わたしに会いに来るほどの度胸があったなんて、と内心とても驚いていたのですが、口実はちゃんとありました。何でも、妹の結婚相手の電力会社社員が烏丸さんの友人で、結婚式にも出席するのだそうです。

「オネエサン、烏丸の会社にいたみたいだよって聞いてさあ、びっくりしたよ。でも、何か嬉しいな」

烏丸さんが言い、わたしは今まで空気のような存在であった妹の相手に、心の底から感謝したのです。

「ミスタージラフ（新人翻訳者はこう呼ばれているようです）はすごくよくやってくれるんだけど」

三十分ほど――たった三十分だったなんて！――で食事を終え、店を出るときに烏丸さんは言いました。

「俺はやっぱ水野さんの訳が好きだな。あっさりしてて、水の向こうに原文が見えるみたいで」言葉は淀みなく、わたしには彼がそれを準備していたことがわかりました。

「わたしも、」

好きです、と思わず言いそうになるのをこらえたら、

「わたし、烏丸さんがよくしてた、星座の柄のネクタイが好きです」

とよくわからないことを言ってしまいました。

でも、言いたいことは伝わったと思います。それを聞いたときの彼が、日差しよりも眩しく笑ったから。

ネイビーのVネックのドレスで、形はとてもシンプルなんだけど、銀色と水色のラメがちらしてあってね、夜空みたいに見えるの。銀色の刺繍がしてあるスカラップのレースがスカートにかかっている、それも何というか、星雲みたいで好き。

「夜空って、何か水野さんにぴったりだね」

齒黒さんはそう言いながら、流れるような動作でハサミを操ります。雨の日の美容室は照明がやわらかで、晴れの日よりずっと親密に感じられます。そのオレンジ色の照明に照らされた白い床の上に、髪がばさばさ落ちて行きます。髪を切ってもらうときは、鏡より床を見る方が好きです。自分が背負っているものが、髪と一緒にどんどん落ちて行くのがわかるから。

美容師に恋をした、と言った友人がいました。やめたほうがいいよ、と昔の――まだ大学生の頃だったかしら？――わたしは言いました。

「美容師さんは仕事なんだから、優しいのは当たり前でしょう？それを勘違いして、傷付くのは自分なんだよ」

馬鹿なことを言ったな、と思います。何も求めなければ、恋は完全に自由なのに。

「でも俺、選んであげたかったな、水野さんのドレス」

「うそ、ごめんなさい」

口調が本気だったので、わたしは焦って謝りました。齒黒さんなら「花嫁の姉が着るドレス」として、マナーにかなった、それでいてため息が出るくらい素敵なものを選んでくれるに違いありませんが、夜空のドレスはプラネタリウムの帰りに小さな洋品店で衝動買いしたもので、お披露目の機会をずっと待っていたのです。

「ううん。そのかわり、ドレスにぴったりの下着を選んであげる」

齒黒さんが声をひそめて言い、わたしは体が熱くなってしまいます。齒黒さんと抱き合うようになってから、わたしはいつも彼の選ぶ下着を着けています（彼は何とランジェリーショップに堂々と入って行き、「女の子へのプレゼントです」と宣言してそれらを購入するのだそうです。）。白と水色のレースのものや、青いシルクに金の刺繍がしてあるものや、レモン色の布地に葉っぱの立体モチーフがついているもの。下着が小さな芸術品であることに気付いたのは、全く彼のおかげです。だから、わたしは下着をとられるときよりも、むしろ付けてもらうときの方が好きだったりします。でも、でも、本当は、烏丸さんにそれをしてほしいのだけれど。

頭皮ではない部分――うなじとか、耳とか――に触れる指は、なんだかとてもエロティックで、わたしは烏丸さんのことを思い出してしまいます。そうして、深い水の中に潜ります。

「水野さんって、何のお仕事されてるんですか？」

みつあみが可愛らしい新人の女の子が床を掃きながら、屈託のない笑顔をわたしに向けます。少女のような、眩しい笑顔です。

「えっとね、条例とかを審査するの」

「え、何て？」

「つまりね、市役所で、保育所のこととか税金のこととか色々決めて、担当者が条例を作るでしょう？その内容に矛盾がないとか、日本語がおかしくないとか、そんなことを審査するの」

「えええ、すごい、そんな仕事があるんですか？」

わかってくれたかどうかはわかりませんが、女の子は本気で驚いたようでした。転職以来そういう反応に慣れてはいたものの、その素直さに思わず苦笑してしまいます。本当に、世の中には実にたくさんの職業が存在するのです。

「式の日、セットさせてね」

鏡の中の齒黒さんが言います。

「すっごくセクシーにするから」

「やめてよ、妹の式なんだから」

笑いながら、髪をすく齒黒さんの指を眺めます。長くて、一本の指輪もはめていない指。

結婚は、もういいや。出会ってしばらくの頃、齒黒さんはそう言いました。

「女の子ってどうして、結婚したら自分も相手も閉じ込めて、殺してしまおうとするんだろう。男のせいなのかな」

白い歯を見せて疲れたように笑う齒黒さんを見ながら、それはきっと自分のことだとわたしは思いました。そうして、そうでありながらも、わたしには齒黒さんの気持ちがとてもよくわかりました。

薄緑の液体を数滴なじませた手で、齒黒さんはわたしの髪の毛をそっと撫でて行きます。森のような匂いがわたしを包みます。わたしの髪は、わたしの言うことはちっともきかないくせに、齒黒さんに優しく撫でられると、途端に従順になるのです。もしかしたら、体の相性で言えば、齒黒さんほどよい人はほかにいないかもしれません。とはいっても、一番大切なのは、やはりファンタジーなのですけどね。

レジでお金を払うときに、わたしは思い出してカバンから包みを取り出しました。

「これ、レモンとジンジャーの、ノンカフェインのお茶なの。歯黒さん、カフェイン取ると寝れないし、カモミールとかもハーブ臭くて嫌だし、寝る前の飲み物に困るって言ってたでしょう？」

二人で会うときに渡せばよかったのですが、わたしは一刻も早く、歯黒さんの喜ぶ顔を見たかったのです。

歯黒さんは、ぱあっと顔を輝かせました。

「ありがとう。俺、これ、飲まずに一生大事にするよ」

邪気のない言葉に、わたしはあつけにとられ、それから嬉しくなるよりも、むしろ悲しくなってしまう。本当に愛し合っていたら、これほど嬉しい言葉はないというのに。

ガラス戸の向こうでは冷たい雨が降っています。歯黒さんの穏やかな視線は離れがたいものでしたが、同時に一刻も早くそれから逃れたくて、「ありがとう」という言葉を振り絞ったら、何だか泣きそうになりました。

「何かあの子、普通の女みたいね。昔はもっとトゲトゲしてたのに」

ちょっとあなた、何てこと言うの、と小声で言った後、母は唐突に口をつぐみました。それで、わたしは自分が気を使われていることを知ります。そうか、わたし、可哀想に見えるのか。結婚に失敗したのに、妹の結婚式に出席させられて、若い夫婦の幸せな姿を見せつけられて。

いけない、いけない、上品にしくちゃ。わたしは目の前のお皿に視線を落とし、「つめたいうちにお上がりください」といって出された、緑のソースがかかった生の魚を口に入れます。ソースはバジルでできているようで、グロテスクな見た目からは想像できないほどおいしいものでした。わたしはできるだけ上品にそれを咀嚼し、ゆっくりと飲み込んだ後、再び少量の魚の身とソースをフォークの背に乗せます。そうしている間にも、烏丸さんの視線を感じないではいられません。席が離れているにもかかわらず、その視線に含まれる熱をもわたしは感じ取ってしまいます。烏丸さんは見てくれているのでしょうか。きらきら光るパウダーをはたいた胸元や、小さな真珠のイヤリングをつけた耳や、赤の口紅の上にグロスを塗った唇や、歯黒さんがアップにしてくれた髪から出るおくれ毛を。考えれば考えるほど、見てくれている、という確信が大きくなって行きます。

緊張と幸福ごと、わたしは料理をゆっくりと味わい、飲み込みます。この会場で一番大事なはこのことなのです。妹がありきたりの花嫁に見えることも、新郎がわたしに何の印象も残さないことも、親戚みながわたしを気遣っていることも、大した問題ではありません。披露宴の後、どうやって烏丸さんと一緒にタクシーに乗り込もうかしら。わたしは烏丸さんとおそばを食べた日からそればかりを考えています。

「きれいねえ、今日子ちゃん」

向かいに座った伯母が、存外心のこもった調子でため息をもらします。この人、どの結婚式でも――わたしの結婚式でも――同じことを言って来たんだらうな、と冷ややかな気持ちになるのは、わたしが子どもじみているからでしょうか。

「わたしの妹ですからね」

「お、強気だな」

妹の結婚について、わたしが怒りや僻みや悲しみを感じていない、あるいは感じていても露わにしないのを見てとり、伯父が安心したように言いました。老けたな、と思います。祖父に似て来たな、とも思います。その祖父は、わたしの結婚式のときは健在でしたが、今はもういません。

シャンパンのグラスを一息に干します。しゅわしゅわした冷たい液体がのどをすべる感覚、鼻から抜けるアルコールの香り。グラスについた口紅を指でぬぐい、その指をナプキンの端っこでぬぐいます。爪には、歯黒さんが施してくれた紺のマニキュアが、照明を受けてつやつや光っています。

祖父はいなくなり、母はわたしに気を使うようになり、妹は普通の人になり、わたしは優等生ではなくなりました。時間は流れ人は変わるという事実、わたしはいつも混乱させられています。妹は平気なのでしょうか。世界の失った部分を、彼女は何で埋めているのでしょうか。にこにこしながら友人たちとおしゃべりしている彼女はとても落ち着いていて、わたしよりずっと大人で、ずっと多くのものを受け入れているように見えます。

ふと妹から視線を外すと、烏丸さんと目が合いました。烏丸さんは一瞬で目を伏せてしまいますが、ずっとこちらを見ていたのが丸わりの伏せ方なので、わたしはおかしくなって、そして信じられないくらい嬉しくなってしまいます。もうやめよう、考えても仕方がないのだ。わたしはもやもやを振り払い、烏丸さんで心をいっぱいにしなが、バターを塗った温かいパンを口に運びます。

「今日はうちに泊まって行くの？」

母がおずおずと尋ねました。おしろいの粉が目元のしわに入りこんでいるのが見え、わたしはあわてて目を伏せます。

「ううん。帰るわ」

返事は何だかとりつく島なく響き、わたしは少し後悔してしまいます。でも、仕方ありません。実家にあるものはすべて過去の干物のようで、わたしをときめかせる何もないのですから。

「あのドレス、すごく似合ってるけど、お母さんと選んだの？」

少ししょげてしまった母に言うと、話題を得た彼女は、嬉しそうに説明を始めました。

「ソースがついてる？」

ハンカチで、烏丸さんのうすい唇をなぞります。小さく身震いして、烏丸さんは目を閉じました。

同じタクシーに乗るのは簡単なことでした。烏丸さんの方から声をかけてくれたのです。俺、二次会行かないから、よかったら、同じ方向だし。烏丸さんにそんなことができるとは思ってもみませんでした。わたしはその積極性に答えなければなりません。

「ごめんなさい。ついてなかった」

酔ったふりをして、できるだけ天真爛漫に言ったその一瞬後、わたしは抱きしめられていました。

「水野さん、お願い、今夜だけでいいから」

目をつぶって欲望に耐える烏丸さんの顔は、すごくセクシーです。彼の体にもっとももっとくっつきたくて、服を着ていることがもどかしくなってしまいます。

でも、しっかりしなくちゃ。ここまでだ。行けるのは、ここまでだ。この人は、齒黒さんとは違う。

「今夜だけでいいから、一生秘密にするから、だめかな？」

「……だめなんです」

逡巡を断ち切って言うと、烏丸さんは大事なおもちゃを取り上げられた子どものような顔をしました。

「どうして？」

「今のままだ、いちばんいいから」

「でも、でも、こんなに好きなのに」

口を閉ざし、目を伏せて、烏丸さんがわたしの顔を眺められるようにします。窓から時折流れ込む街灯のあかりによって、白くたよりなく見えるであろうその顔の上に、欲望や衝動がごたまぜになった視線が注がれます。烏丸さんの願うとおり、このまま行けるところまで行ってしまうのもひとつです。うまくすれば彼を宗教や恋人から引き離すことができるかもしれないし、うまく行かなくても人生をたっぴりと味わうことができるでしょう。でも、わたしが今求めているのは、恋という水で心や体を潤すことだけなのです。水を永久に得るためには、終わらせてはいけないし、終わらせないためには、始めない、あるいは途中で止まることしかないと思うのですが。

「こんなに好きなのに」

「好きなままでいてほしいんです。色々うまく行かなくなって、苦い思い出にしたくないの」

「俺、どうしたらいいの？」

彼がうつむいたのを感じ、わたしは彼のネクタイの結び目あたりに視線を向けました。そのネクタイを外し、ボタンを外し、シャツをとったところをわたしは想像します。裸の体の熱や、肌の感触や、鍛えてはいなくとも女とは違う固い体のことを。その上を這うわたしの十本の指を、彼はきつととても冷たいと感ずることでしょう。

「考えていてください」

わたしは言いました。

「わたしのこと。わたしも考えるから」

お通夜の受付のときみたいに、ぼそぼそと発声します。考えることほど素敵なものはないことを、どうしてみんな知らないのでしょうか。例えば、齒黒さんの指が選んだレースのブラジャーを、烏丸さんの指が取る、その心の中の幻想を、わたしはどんな現実によっても壊されたくないのです。そのあと、烏丸さんの手が――体の他の部分よりずっと男らしく見える手が――私の胸を包むでしょう。感激した手が震え、だんだん大胆になって、熱くなって、自由になって、わたしの白い体を開くでしょう。

わたしは両手で烏丸さんの右手をとり、その唐突さに驚く彼を置き去りにしたまま目を閉じて、自分の中に沈みます。湿った声やため息が、のどをせり上げるのを感じます。本当に、考える

ことほど素敵なことであるでしょうか。

烏丸さんのひとさし指が、わたしの手のひらをなぞるにつれ、背骨がぞくぞくし、体に水が満ちてゆきます。今。今。本当に抱かれているときではなくて、ここで二人、一歩先にある幻想に心を燃やすとき。これがきっとわたしの求めるもの。わたしの世界を埋めてくれるもの。終わらせては、いけないのです。

「人生は続いて行くから」

「何か言った？」

「……いいえ」

夜の空気は冷たく青黒く、タクシーは海の底を走っているみたいです。烏丸さんの手を両手で包みながら、車が目的地に着かなくて、夜がいつまでも明けなくて、この時間がずっと続けばよいのにと、わたしはただそれだけを願っていました。